

靴の歴史散歩 (85)

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

『櫻組製造品定價表』は、製造品目の第一が靴で、本乗馬靴（16円50匁ヨリ26円マデ）を筆頭に、騎兵長靴（8円ヨリ12円マデ）、競馬靴（5円ヨリ8円マデ）、遊獵靴（5円ヨリ7円マデ）、禮服半長靴（6円ヨリ8円マデ）、測量靴（3円50匁ヨリ5円50匁マデ）など、紳士靴あわせて25点が銅版画と共に掲載されている。それぞれの靴の名称から、いかにも明治初年の匂いが感じられる。（写真参照）

婦人靴も、婦人アミ上靴（4円ヨリ5円50匁マデ）、婦人禮服靴（4円50匁ヨリ5円50匁マデ）、ボタン留靴（4円ヨリ6円マデ）、飾付半靴（3円ヨリ4円マデ）など、意外なことに12点もあった。上流階級では、欧米並みに婦人同伴の機会が多かったのであろうか。

子供靴（1円50匁ヨリ3円マデ）も、3点ほどあったが、大人の靴をそのまま小さくしたようなデザインばかりで、ちっとも可愛くないのが印象にのこった。

この他に座敷靴（50匁ヨリ1円50匁マデ）

というのが2点あったが、もうこの頃、室内履きの需要もあったことが分かる。

製造品目の第二は馬具で、乗馬用具と馬車用具が20点掲載されているが、本題ではないので省略させていただく。

第三は旅装具で、トランク、カバン、袋物など、総数32点と数が多い。

ハンドバッグがつくられ、普及するようになったのは、大正末から昭和初年だったといわれるが、明治20年（1887）のこの頃に、ハンドバッグの原型とも見られる小型の手提げや、把っ手つきの手提げなども見られるから、新発見でもしたようでうれしい。

製造品目の第四は、工業用ベルト（調草^{しらべ}）なのでこれを省略し、営業品目の中から蒲團皮^{しらべ}について触れておきたい。

今はまったく見かけなくなったが、革の座布団は一生物といわれるほど丈夫で、使い込むほどに風合いも増すところから、大変愛用されたものである。産業史料として、ぜひ手に入りたい一品だが、残念ながらまだご縁はない。

